 書 評

П. А. Орлов, Русский Сентиментализм. Изд-во
Московского университета, 1977, 271 стр.

佐々木照央

革命後における18世紀ロシア文学の研究は П. Н. Сакулин (1868—1930) によって革命前の研究の秀れた成果が継承発展され、その後も革命前の教育を受けた人々、Г. А. Гуковский (1902—1950), П. Н. Берков (1896—1969), Н. К. Пиксанов (1878—), Д. Д. Благой (1893—), などによって担われてきた。ソ連における研究の転機は30年代の半ばごろに急激に起った。それは研究論文集『18世紀』の刊行に端を発する。『18世紀』はА. С. Орлов を座長とし、Г. А. Гуковский や П. Н. Берков, Н. К. Пиксанов をはじめとする秀れた研究者達を集めて発行される。1935年の第一号から判断すると、このグループには発足当時にすでに文献考証に重きをおく傾向と文学史の時代区分及び作家の位置づけを重視する傾向とがあった。前者はアルヒーフの探索・公表に重きをおく Берков, 後者は分析を重視する Гуковский, を中心としていた。スターリン体制下の粛清の嵐の時期の30年代後半に、「俗流社会学的方法」、「フォルマリズム」などの名称のもとに数多くの研究者が表舞台を去った。Сакулин の成果は「俗流社会学的」として否定され、Берков, Пиксанов とも同じ運命にさらされた。1937年にすでに原稿が出来ていながら40年になってやっと出版された『18世紀』第2号は Гуковский の編集であった。彼の冒頭論文はフォルマリズムと俗流社会学的研究を批判し、かつ諸事実の収集・公表に傾く立場を批判しながら、文学史の時代区分や作家の位置づけを史的唯物論に従って確立することを主たる課題とした⁽¹⁾。この時期に Г. П. Макогоненко が登場する。極めて厳しい制約条件の中で Гуковский は公式的な立場の表明にもかかわらず、自分の観察を偏見にとらわれることなく発表し、秀れた実証的な研究を残している。その後彼はフォルマリズム的な研究、文学作品自体がもつ文学形式やスタイル等の芸術的手法に関心を向け、1949年に粛清された。18世紀研究は厳しい条件下にも研究者の不屈の努力によって継続され深められた。スラヴ中心主義的な研究が強いられた時ですら、ベリンスキイ以来の伝統

的な見方、つまり西欧の模倣として18世紀文学をみる態度からはなれて、ロシア文学独自の内的発達の過程に注目する研究がすすむ。Благой・Макогоненкоの研究はこの屈折した時期の影響下で不幸な記述を強いられているけれども、断絶をふせいだ彼らの役割は評価されてよい。また戦後のスターリン時代でも、彼らは18世紀研究に不可欠の貴重な著作集や資料集を刊行してきた。しかし研究のゆがみもあり、ロシアの独自性の強調のあまりにロモノーソフやラヂーシチェフを過大評価したこと、文学史に階級闘争論をもちこみ作家の安易な位置づけやリアリズム以外の文学的潮流への過少評価を生んだ。そして屈折した立場から、例えば Берков のように資料公表の解説の中でエカテリーナ二世の批判にスターリンへの批判をこめる⁽²⁾ という現象も生まれた。

スターリン批判後の『18世紀』第3号は1958年に Берков の編集で出た。彼は20～30年代の研究を綜括し、史的弁証法的唯物論で武装された研究・意義を慎重に評価しながら、今後の課題としてファクトファインディングを主体にしたアルヒーフ発掘・公表をふたたび提唱した⁽³⁾。その後彼は「古典主義」、「センチメンタリズム」、「ロマンチズム」などの用語に縛られた規定づけや時代区分の研究に反省をうながし⁽⁴⁾、さらに「18世紀」の研究に階級闘争史観を安易にもちこむことの不適當性を訴えるに至った⁽⁵⁾。

本稿でとりあげる П. А. Орлов の研究は規定問題に真正面から取りくむことによって既存の規定の歪みを直そうとするものである。彼は「文学の発達過程とロシア社会思想史の中で、この傾向（センチメンタリズム）の真の役割と意義を定めること」[267]を主たる課題とした。それゆえに先人達の研究の批判的検討が彼の大きな課題であり、特に Макогоненко への批判が大きなウェイトを占める。しかし著者の研究態度は Берков の流れよりもむしろ Гуковский, Макогоненко, Благой の方向を発展させようとする。それは著者の「センチメンタリズム」の時期区分の試みからもうかがえる。現在、この「センチメンタリズム」という用語についてさえ、西欧の「プロレマンチズム」との関係などからその妥當性に検討が加えられつつある⁽⁶⁾けれども、彼の研究にはその前提への疑念は全くない。このような問題点をはらみながらも、センチメンタリズムを第一期（1760—1775）、第二期（1776—1789）、第三期（1789—1796）、第四期（1797—1811）に時代区分したことはカラムジン、ラヂーシチェフ以外の群小作家達のセンチメンタリズム的傾向をとりあげていくという長所を生んでいる。第一期は開始をいつと定めるかという問題であり、著者は『有益な娯楽』誌（1760—62）に注目して、そこでルソーの『人間不平等起源

論』を紹介した人々に着目する。従来 Гуковский や Благой は18世紀70年代をもってセンチメンタリズムの誕生としていたがそれを少し以前に遡らせる方向はすでに Г. Н. Пospelov らによってうちだされていた。それゆえ著者は最近の研究を深化させたといえる。また初期の中心的作家として彼はヘラスコフに注目するが、これはすでに Гуковский にもあった。そしてルソーへの偏見を取り去った研究態度もやはり Гуковский にあった⁽⁷⁾。さらに第四期についてはそれをセンチメンタリズムとみるかプレロマンチズムと考えるかによって最近のソ連でも議論の別れるところであり、これから問題とされる可能性がある⁽⁸⁾。概して時代区分問題という形式的側面では著者の良い意味の独自性はあまり出されていない。

彼の特色はラヂーシチェフのみならず、他のセンチメンタリズムの作家達の「進歩的」側面を強調し、啓蒙主義的要素を含むものとして再評価を試みたことである。これも Берков にあったので全く新しい立場とはいえないが、少なくとも Макогоненко のセンチメンタリズムへの偏見を克服する意味で意義がある。

著者の最大の功績は革命後これまで深く分析されることのなかったロシアフリーメーソンとカラムジンの文学との関係の考察であろう。Гуковский にしても最近の Н. Д. Кочеткова でもこの関係は魂の内面に関心をもたせたという意味で継承関係として言及されてきた⁽⁹⁾ けれども、著者はこれを否定対立関係としてとらえた。カラムジン自身はメーソンからの離脱の理由を直接的にはあまり記しておらず、ただ儀式や神秘性への不満をのべるのみである。著者の長所はその理由を様々な角度からつきとめようとした点にある。メーソンの文学とカラムジンの著作（メーソン時代とそれ以後）との比較、А. М. Ктущёв のカラムジン批判の分析、メーソンへの批判という見方からの『ロシア人旅行者の手紙』その他の著作の読み直し、といったユニークな試みは、時には強引と思える解釈もあるけれども（例えば「鏡」についての記述 [138]）、高く評価されてよい。

著者はメーソンの特徴として、原罪意識と結びついた人間本性不完全論、地上の悲しみ喜びの感情の空虚さと靈魂不滅にもとづいた死後の世界の真実性・永遠性の主張、太陽と夜についての神秘的見地、自己沈潜在的な自己認識による自己完成とそれに付随する外界及び他在への無関心、自然に対する美意識の欠如、といった点をメーソンの哲学的作品や文学作品などからひき出し、それをカラムジンのセンチメンタリズムの文学と対比する [116—143]。メーソンの

基本的思考態度は「感性」への低い評価と「理性」の称揚であり、この点にセンチメンタリズムとの根本的な相違があることを著者は証明する。ここからセンチメンタリズムはメーソンの否定によって確立するという見解がでてくる〔141〕。この点に関して著者の分析は示唆にとんでいるが、著者のメーソンの評価に疑問を抱かざるをえない。著者はセンチメンタリズム＝啓蒙主義との立場を強調するあまりに、「メーソンの哲学的見地と文学的嗜好は、センチメンタリズムが形成された土壌の啓蒙主義的諸原理とはげしく矛盾していた」〔141〕と結論し、メーソンを反啓蒙主義とみる。

メーソンの主要な目的は人間の道徳的自己完成にある。人間は、将来、神が神の王国を創る時にその建設の良き手段良き材料とならねばならない⁽¹⁾。それは建築のためには自然の石から研磨された完全な石を作らねばならぬのと同じである。この自己完成を防げるものは「感性」であり、促がすものは「理性」である。ここから自然に対する美意識の薄さ、感性に対する理性の優位の思考態度が生まれる。しかしながら、自己完成の思想は知性の無視につながるのではなく、逆に啓蒙と教育の必要性を訴えるものである。実際にノヴィコフ達はそれを主張し出版教育活動に従事した。著者の見方はルソーのみを啓蒙主義とみる態度であり、一面的である。著者はメーソンを文学の障害物として厳しく評価する。たとえばヘラスコフの創作活動に言及する際に後のメーソン時代の著作の価値の低さや画一性を指摘し、「肉体的及び精神的世界の多様性に対するメーソンの軽蔑的態度やメーソンの宗教的道徳的な問題設定による拘束性はヘラスコフの創作活動に致命的な作用を及ぼした」〔142〕と著者は評する。メーソンへのこの評価はおそらく著者の現代的視点を含んだものであろう。しかしセンチメンタリズムの「進歩性」を擁護するあまりに、メーソンの評価が一面的となるという極端な著者の態度に私は賛成できない。そのような問題点はあるけれども、本書はセンチメンタリズムの積極的評価とメーソンを文学史の中で位置づけようとした新しい試みなどにより注目すべき研究である。

- (1) 《XVIII век》. Сборник статей и материалов. Под ред. Г. А. Гуковско-го. сб. II. М.-Л., 1940. стр. 3-9.
- (2) Сатирические журналы Н. И. Новикова. Под ред. П. Н. Беркова. М.-Л., 1951. стр. 13-14.
- (3) 《XVIII век》. сб. III. М.-Л., 1958. стр. 11-17.
- (4) 《XVIII век》. сб. VIII. Л., 1969. стр. 6.
- (5) 《XVIII век》. сб. XI. Л., 1976. стр. 14.
- (6) Н. Д. Кочеткова. Русский сентиментализм. Итоги и проблемы изуче-

ния. «Русская Литература», 1978, № 2, стр. 222–227.

- (7) Г. А. Гуковский. История русской литературы. т. v. Литература половины XIX века. ч. 1-ая. изд-во АН СССР. М.-Л., 1941. стр. 55–74.
- (8) А. В. Архипова. О русском предромантизме. «Русская Литература», № 1, 1978. стр. 14–25.
- (9) Г. А. Гуковский. там же, стр. 59, Natalya Kochetkova. Nikolay Karamzin. Twayne Publishers, Boston, 1975. p. 21.
- (10) Н. И. Новиков и его современники. Избранные сочинения. Изд-во АН СССР, М., 1961. стр. 176.